

# 水天宮信仰の展開について

——久留米から江戸へ——

古賀 瑞枝

## 〔抄 録〕

福岡県久留米市の筑後川畔に鎮座する水天宮は、全国の水天宮の総本宮である。文政元年（二八一八）、時の久留米藩主有馬頼徳が江戸へ勸請、以後江戸の人々に篤く信仰された。江戸の流行神と見るむきもある。現在、水天宮は安産の守護神として信仰されるが、本来は水難除けの神であった。水難よけの神が、なぜ安産の神となったのか。また、高度に医療が発達した現代にあつて、安産の神が信仰されるのはなぜか。

これを明らかにするため、まず、久留米での初期の水天宮信仰について紹介する。次に江戸での信仰、近代に入ってから信仰、

当時の家族と社会について考察する。資料として江戸時代の随筆や日記、明治からは戯作・小説・新聞記事などを使用する。より庶民に近い資料を用いることで、市井の人々が水天宮によせた思いに迫れると考えるからである。

その結果、人々の願いをすくいあげて変容していく神の有り方が浮かび上がったのではないかと考える。

**キーワード** 水天宮 流行神 安産 水神 医療信仰

## はじめに

福岡県久留米市の水天宮は、全国の水天宮の総本宮である。社殿は日本第二の流域面積を持つ筑後川中流域に位置し、祭神は天御中主神・安徳天皇・高倉平中宮（建礼門院徳子）・平二位時子（平清盛妻）

で、社伝によれば創建は寿永四年（一一八五）三月、壇ノ浦の合戦後、平家の女官按察使局伊勢が久留米へ逃れて建久年間（一一九〇～九九）に安徳天皇を祭ったのが始まりとされている。局は尼となり名を千代と改め、平知盛の二男少将知時の子儻（むかし）を養子として祀務を委ねた。これが今の神官真木氏の祖先である、という。その神徳は主に子ども

の水難よけであり、現在でも夏になると水天宮の護符入りの小さな瓢箪の御守を首に下げた子どもたちを見ることが出来る。もう一つ、水天宮の神徳に安産守護がある。特に江戸時代に第九代久留米藩主有馬頼徳が江戸の久留米藩邸へ勧請した事に始まる東京水天宮では、現在でもこの日に祈願すると安産するという戌の日には多くの参拝者がお祓いを受け、あるいは御守付の腹帯を求めるなど、安産の神として篤い信仰を集めている。

なぜ、水難除けの神が安産の神として信仰されるようになったのだろうか。また、医療が高度に進歩した現代にあつて、安産の神が信仰されるのはなぜなのだろうか。こうした点を明らかにして、水天宮信仰の展開を現世利益の視点から解明していきたい。

水天宮についての研究では、まず小中村清矩<sup>①</sup>があげられる。

水天宮の社伝に対し、小中村は「儕」の名は『尊卑分脈』『諸家系図纂』に見えず、なお考えるべきであるとしている。また、水天宮信仰の起源を安徳天皇、建礼門院、二位尼の慰霊に求め、仏教の水天竜王を表向きの祭神としたと考えた<sup>②</sup>。水天宮の名はこの水天竜王に由来し、何時の頃からか「最初安徳天皇、建礼門院、二位尼三座と水天龍王二座とを勧請」していたものが後に水天王を天御中主に改めたものとする。

次に三田村鳶魚の研究がある。三田村は「水天宮及び有馬侯頼徳」(『日本及日本人』大正四年へ一九一五三月一日号)で、水天宮は筑後地方で流行していた「天御前(アマゴゼン)」という社が水神の社と合祀され水天宮となったとした。江戸での展開は、文化文政頃大名

藩邸で屋敷神を祭り、庶民に公開して多額の賽銭を集めていた例をあげ、久留米藩の水天宮公開もこの頃で賽銭稼ぎを目的としたとする。

これに対し、次号の『日本及日本人』(同年三月十五日号)で久留米人の反論が掲載される。筆者の「銅牛」<sup>③</sup>は有馬家々史編纂主任で、水天宮は久留米地方では古くから「尼御前(アマゴゼン)」と呼ばれる水神で「天御前」ではないと指摘、尼御前は「アマゴヒゼ(雨乞瀬)」の転訛とする。「水天宮」の文字を見るのは文政以後で、江戸の水天宮は鎮火神と推定、久留米藩邸に火天風天を祀る両天宮があつたところから水天も創祀されていた可能性がありとし、尼御前勧請時、水天とともに水天宮となったとした。賽銭は軍用金として貯蓄されたという。

続いて、柳田国男に教えを受けた久留米の郷土史家、及川儀右衛門<sup>④</sup>が大正十二年に発表した「水天宮の研究」<sup>⑤</sup>がある。及川も水天宮の最も根本的な姿は水神であり、祈雨、止雨を中心とする雨師の神で、仏教の水天信仰と習合したとする。有馬家は代々大名火消を務め、火災除のために江戸の藩邸内に水天を祭る水天宮ができており、信仰内容の類似した本国の尼御前と結合して水天宮尼大明神となり火難水難を除き安産等の御利益を有するものとして民衆の信仰を集めるに至った、という。

宮田登は江戸の流行神としてとらえた。水天宮は「もと有馬家の屋敷神」で、「有馬家に祀られていた段階では、水難除けの靈験があり、水難除けの札が、発行されていた」が、「江戸の水天宮になると、水難よりも安産の守札を出して有名となっていた」<sup>⑥</sup>とする。さらに、

宮田は水天宮信仰は本来母子神信仰で自然と安産信仰が中心となった<sup>⑨</sup>、とも指摘している。

しかしながら、筑後地方の研究では、水天宮は本来筑後川の水神で航海神へと変化した<sup>⑩</sup>としている。

さて、これまでの説からは次の点が疑問としてあげられる。

第一に、本来の祭神はどういう神であったかという点である。これまでの研究では水神で一致しているが、その水神は雨の神なのか。この点については、久留米に伝わる資料によって確認しておきたい。

第二に、仏教の水天との習合である。小中村説では、水天宮信仰の始まりの時点で水天と安徳帝以下が習合していたとし、及川説では水難よけの尼御前が「積極的に福を授けるよりも消極的に禍を避ける方に発展していった点に於て火難除けを主とした江戸の水天宮そのものと声息相通ずる」<sup>⑪</sup>ため結びついたとするが、江戸時代以来水天宮は福神としても信仰されている。

第三に、安産信仰がいつから始まったのか、火難水難除けの神がなぜ安産信仰を持つに至ったかについて検討されていないようである。安産信仰に注目した宮田説では、水天宮は「もと有馬家の屋敷神」であり、「江戸の水天宮では水難よりも安産の守札を出して有名」になったとする。しかし、水天宮は久留米では「有馬家の屋敷神」ではない。有馬氏代には久留米城下町の瀬下町に祭られた神である。また、江戸の水天宮が水難の守札よりも安産の守札を出したわけではなく、守札は同一のものである。

もう一つ問題として、水天宮の多様性があげられる。現在、各地に

祭られる水天宮は久留米の水天宮とは直接関係がない社もあり、川辺や池の畔に祭られる小祠がいつしか「水天宮」と呼ばれていることもあるという。つまり、「水天宮」と呼ばれていても、その在り方は一様ではないのだ。これまでの研究に見られる錯綜する相はそこにも原因があるのではないか。そこで本論では、久留米水天宮に起源を持つ水天宮信仰にのみしぼって考察する。

## 第一章 水神としての水天宮信仰

### 第一節 信仰の始まり

寛文十年（一六七〇）、久留米藩は寺社奉行設置に伴い藩内の神社にその由緒を報告させた。『久留米藩社方開基』<sup>⑫</sup>（以下『社方開基』）はそれをまとめたものである。水天宮は久留米城下新町壱丁目の社人忠左衛門が寛文十年九月晦日に次のように報告している。

一、当社尼御前大明神、千年川之水神ニて御座候。左ニ荒五郎大明神、右ニ安坊大明神同殿ニ三社御座候。古之宮地は京隈梅林寺山ニ社御座候。山之下ニ御池御座候。何之代より開元建立御座候哉伝不奉承候。然処、慶安三年庚寅九月、忠頼様え言上仕、瀬之下宮屋敷致拝領、社再興仕候事（後略）

この記録によれば、祭神は「尼御前大明神」という千年川（筑後川）の水神で、左に荒五郎大明神、右に安坊大明神の三神構成の神である。荒五郎は牛馬守護の水神で、尼御前大明神でも「駄祭」<sup>⑬</sup>が行わ

れたというから、尼御前大明神も荒五郎と同じタイプの水神である。この時点では「水天宮」ではなく、「尼御前社」と呼ばれた。この記載に従い、本論でも「水天宮」に統一されるまでは尼御前社と記し、現代の一般的な呼称については水天宮と記す。

慶安三年(一六五〇)九月、尼御前社は久留米藩有馬家二代藩主忠頼から現在地の瀬下に社地を拝領し社を再興した。ここに落ち着く直前は現在地よりやや上流の京隈梅林寺山にあり、霜月十五日には白米一斗二升に魚を添えて社地下の池に収める御供納ごくおさめの祭があつたが、寛文十年にはすでに絶えていた。この祭は筑後川対岸の宮の陣町八丁島に同様のものが受け継がれ、その概要を知ることができる。八丁島の「御供納」は新嘗祭の行事と、人身御供の行事が一緒に行われる祭で、「霜月の収穫感謝の祭りも、ときに大氾濫を起こす筑後川の荒つ神を鎮めようとする、水神の祭りを兼ねていた」と考えられており、「筑後川中流域で共通した水神祭」と推察されている。<sup>(21)</sup>

六車由美は、人身御供祭祀の生れる過程は「男性中心の頭屋制による祭祀組織の確立と、それにもなう女性奉仕者の周縁的な役割への排除」の結果、巫女によって祀られていた「祟り神」が村落共同体の「守り神」への変容だという。<sup>(22)</sup> なお検討を要するが、社伝という千代から儋への代替わりはこの変化の記憶ともいえよう。また、「尼御前」の呼称とその起源について、山中耕作は女性唱道者の存在を指摘している。水天宮の神紋は井桁に椿で、山中はこの神紋に注目した。椿は「八百比丘尼」の象徴であるという。山中は八百比丘尼は複数で源平合戦譚を代々語り継いだとし、水天宮の尼御前は尼形の瞽女で、平家

物語を語りつつ筑後川を上下し、水難除けの神符を売ったと推定している。<sup>(23)</sup> いずれにせよ尼御前社でも初期の神祭りには女性の存在があったと考えられるが、尼御前社の位置づけについて『社方開基』で忠左衛門は「私義吉田派、無位三て御座候事」と述べている。吉田派とは京都の吉田神社の事で、寛文五年(二六六五)の諸社禰宜神主法度(「神社条目」)の発布以降、諸国の多くの神社神職は吉田家と関係を持つことになった。<sup>(24)</sup> 尼御前社も早々に吉田社に属していたらしい。

つまり、古くは尼御前社では巫女によって筑後川の水神が祭られており、やがて男性神主による祭祀へと移行したと考えられる。寛文十年の段階では、祭神は尼御前大明神、荒五郎大明神、安坊大明神の三神である。この神は雨の神ではなく、筑後川の荒ぶる神の象徴であった。

## 第二節 城下町形成と尼御前社

前述のとおり、尼御前社は慶安三年に久留米城下町瀬下に社地を拝領した。これは、尼御前社が有馬氏の城下町形成の一端に位置づけられたことを意味する。瀬下町は、有馬家の下で久留米藩の物産を積み出し、有明海を経て長崎や大坂への藩米の回送を行う川港として整備された町で、尼御前社は瀬下町の守護神として期待されたのである。

瀬下町の豪商石原為平が有馬氏入国以来百五十年間の出来事をまとめた『石原家記』<sup>(25)</sup>によれば、寛文十二年(一六七二)、瀬下町を中心とする氏子たちにより、尼御前社の祭礼が始まっている。尼御前社は瀬下町の氏神として機能しはじめていたものであろう。

延宝三年（一六七五）、久留米藩の藩医真名部（真辺）仲庵はその著『北筑雑纂』<sup>27</sup>で尼御前社の信仰について「水神にして能く水災を除く者なり」と書いている。また、筑後川の尼御前に対しその支流巨瀬（九十瀬）川に九十瀬入道という主があり、尼御前と夫婦神として信仰された。この夫婦神が逢う時には暴風雨となり、遊泳する者は溺死してしまうが、巫人の売る咒符を身につけていればそれを免れる、という。この夫婦神について、仲庵は「或曰」として「九十瀬入道者平相国浄海、而尼御前乃夫人二位之霊也」と記録する。九十瀬入道は平清盛、尼御前はその妻二位尼だというのだ。この尼御前と二位尼説は、『社方開基』には見られず、巷に流布していた俗信と考えられる。尼御前社の水難除けの神徳は海に沈んだ平家を連想させ、信仰に平家伝説が取り込まれていったものであろう。

安永六年（一七七七）、筑後全誌『筑後志』（久留米藩士杉山正仲著）では、尼御前社は筑後川の水神で、祭神は「二位ノ尼安德帝を抱く像、女院の像、平知盛戎衣を被弓矢を持する像」の三体で、神徳は水難よけであり、水虎伏せ（河童よけ）であった。祭礼は毎年四月五日の川祭と十一月十五日で、船での神幸は筑後川河口の榎津まで行く。<sup>28</sup>榎津は海船が入る港であり、筑後川を下ってきた川船はここで荷物を海船へ積み替えた。大坂までつながる川港瀬下の神となった尼御前社には、海上交通の安全と水難除けの神徳が求められたのである。

### 第三節 江戸への水天宮勧請

水難除けの神徳をもって信仰された尼御前社は、寛延二年（一七四

九）に若津（現大川市、筑後川河口）出入り大坂借船船頭中から御神輿寄付（『石原家記』）を受け、翌年には御神幸が若津まで行く（同前書）など、藩主家や水運関係者に深く信仰された。<sup>30</sup>藩主ごとに久留米領内の動向や藩主の事績を記した『米府年表』によれば、九代藩主頼徳の治世である文化十四年（一八一七）、これまで四月五日の一日だけであった「水天宮」祭礼が四月五日から三日間行われた。この記録は、「水天宮」という呼称の初見である。文政元年（一八一八）九月、頼徳は江戸の久留米藩三田上屋敷（赤羽根御殿）へ水天宮を勧請する。十一月には、寺社奉行松平伯耆守に公開の伺書提出、毎月五日に水天宮御門を開き一般参詣を許す事とした。これが「東京水天宮」の始まりである。この時の伺書は次のようなものであった。

有馬玄蕃頭領分筑後国筑後川水神与相唱、久留米城下町内江往古より神社勧請有之、水難除札守差出来候処、近年隣国者勿論、当御地ニ而茂信仰之者多御座候、然処兼而赤羽上屋鋪内江手輕之仮社勧請仕置候、依之信仰之者参詣相乞候者、北通西門平常家中扶持米・材木等引入、且表門・裏門差支等之節者通用門同様二相用候儀ニ御座候、幸社最寄ニ御座候間、右門より毎月五日暮六時限参詣差許申度奉存候、此段奉伺候、以上

御名家来

（久留米藩留守居）

小峯善太

十一月朔日



この文書から、祭神は筑後川の水神で水難除けの守札が出されていたこと、近年は隣国は勿論江戸でも信仰する者が増えていたことがわかる。つまり、江戸勧請当初の祭神は本国久留米と変わらず、水難除けの水神であった。

水天宮の公開年について『宝暦現来集』(天保二年(一八三二)刊)には「文化年中より」とあり、前記文書と矛盾する。その利益は水中への落し物、特に鉄物の発見で「産にむかひて守を頂けば、直さま安産也」と伝える。『江戸拾葉』<sup>34)</sup>には、「芝三田有馬様の御屋敷内に水天宮尼大明神と申御社あり、去年<sup>〔割注〕</sup>文政二年<sup>〔注〕</sup>寅九月五日裡門を開かれ」参詣を許された、とある。邸内は参詣人で「爪もたたざる」程で怪我人までもあった。人々が求めたのは守札で、その利益は「火防安産水難或はものゝつかへて出かぬる杯、或は咽にとげなどの立たるに一字をきりぬき水にて吞ば立処にぬけ出る事おそろしきまで利益すみやかなり」という。祭神は安徳天皇と二位尼である。

文化文政期、江戸周辺の名勝旧跡を訪ね歩いた隠居僧十方庵敬順は著書『遊歴雜記』<sup>35)</sup>に「有馬家水天宮尼御前の守札」<sup>36)</sup>という一文を圖とともに記している。敬順によれば、守札は久留米から送られ品切れになることもあり、その効果は諸々の魔事厄除、特に水難除けであった。祭神は、「安徳帝をいたきて西海に入水せし祐の局とかやいひし者」であるとも「昔神功皇后の筑前にましませし砌、西海にあらはれし神」だともいう。いづれにしても、水難や水上交通の神である。敬順はあまりの参詣人の多さに驚き、「守札といふもの何程の奇特やあらん、惑ふに及では論なし」と記している。守札の利益について、『東

都歳時記』<sup>37)</sup>(天保九年刊)には祭神はよくわからないが、水難除けの神として信仰された事が記録されており、有馬家の水天宮尼御前社は水難守護を中心とし、庶民の日常を守護する靈験あらたかな神として出現したことがわかる。

## 第二章 医神としての水天宮信仰

### 第一節 曲亭馬琴の水天宮信仰

敬順が驚きの声をあげた水天宮の守札だが、ここで具体的な信仰の様子を見てみよう。

曲亭馬琴は水天宮を信仰した一人で、『曲亭馬琴日記』<sup>38)</sup>に水天宮の記事が初めて書き留められるのは文政十一年(一八二八)九月五日である。天保二年正月十一日の殿村篠斎宛別翰<sup>39)</sup>からは馬琴が水天宮をどう理解したのか知ることができる(傍線、番号筆者挿入)。

当地赤羽有馬殿屋敷内  
所祭水天宮は、十四ヶ  
年已然、文政元年十一  
月五日より、出入の町  
人の願によりて、毎月  
五日二諸人二おがませ  
られ候処、近來ます  
く繁昌にて、参詣群  
集、虎の門の京極殿の



図1 水天宮守札(『久留米小史』所収)

金毘羅と伯仲いたし候。ある人の説に、水天宮ハ内侍所也。寿永に平族入水の時、清盛の後室、彼御鏡を懷にして入水せしに、亡骸云云の浦に漂着せり。當時の民、件の鏡を一社ニまつりて、歲月を経たり。<sup>②</sup>後年、此地、有馬殿の領分ニ成に及て、社宇を壯嚴せられしより、祈るものニ応驗あり。その鏡の背文を印とし、社の別当・神主等、清水を汲て小紙ニ印し、神符として諸人に与るに、是又応驗あり。はじめハ是札を、品川で有馬の船頭出し候ひしが、そをしる人ハまれなりき。<sup>④</sup>かくて文政元年の冬より、諸人ニおがまするに及て、その守札を乞ふもの、五日毎ニ数万人、病あるものハ清水ニて服用ス。畢竟藥同様ニ付、守札の多く出ることを、余の神社のたぐひにあらず。<sup>⑤</sup>靈応もあらたにして、小児の錢をのみたるに、右之守札をのましめければ、程なく右之錢を吐し事、<sup>⑥</sup>又右守札を懷中せしもの、悞て川へ落たるに、<sup>⑦</sup>帶より上ハ浮て、足ハ宙にあり。依之、懷中ものゝぬれざりし事、是等ハ老拙も目撃せし也。その余、くさぐさ、<sup>⑧</sup>応驗ありといふ。

(中略)

俗人の知らざるものハ、直ニ二位の尼を祭りし也とおもひて、けふハ尼御前さまへまゐらうなどいふ男女あり。それより尚無下の俗物ハ、水天宮と申故、天狗也と心得て、羽うちわ画キし挑灯など献じ候も見え候。<sup>⑨</sup>御存のごとく、忤長病、且月々口痛ニて、昼夜苦ミ候間、去年より水天宮へ月詣いたし候。それ故にや、口痛ハよほど快方ニ御座候。依之、右御守札、琴魚様へ致進上候。水はつぽニて、印の処、手にて引ききとり、御腹用被成、白紙の

処ハ川へ御ながし可被成候。御信心被成候ハバ、御腫物やうのしこりニ応驗可有之哉と存候までの老婆親切ニ御座候。もし尚又、御入用ニ候ハバ、可被仰下候。月々参詣いたし候故、何ほどにても受候て、進上可仕候。(後略)

この書簡によれば、久留米藩上屋敷の水天宮は文政元年十一月五日より江戸町人の願いに応えて参詣を許されたもので(①)、祭神は内侍所、つまり平家滅亡の折二位尼が懷にして入水した三種の神器の一つである鏡で(②)、水天宮の守札はこの鏡の背文を印刷したものだといふ(③)。守札の効果は藥同様で(⑤)、子どもが錢などを飲んだときに飲ませればすぐさま吐き出し(⑥)、懷中すれば川に落ちても帶より上は川面に浮かび水に濡れる事はない(⑦)。また、俗人には二位尼を祭っていると思つてゐる者(⑧)や「水天宮」という名称から「天狗」を祭っていると思つてゐる者(⑨)さえある、という。

この書簡から、水天宮の神徳の中心はやはり水難除けであつたことがわかる。また、馬琴は江戸での水天宮信仰の始まりについて重要な情報を記している。「品川で有馬の船頭が出し」ていた(④)というのだ。品川近くの高輪には有馬家下屋敷がある。有馬家下屋敷に出入していた船人が久留米の尼御前社を信仰していたものである。公開時の伺書にいう「隣国者勿論、当御地ニ而茂信仰之者多御座候」とは彼らのことをさしているのではないだろうか。とすれば『宝暦現来集』に水天宮信仰は「文化年中より」始まつたという記述も理解できる。水天宮信仰は、この船人たちから江戸町人へ伝播していったと考

えられる。そのため、水難除けの信仰が残ったものであろう。もう一つ、水天宮の利益としてこの書簡では医神としての側面が強調されている。『曲亭馬琴日記』には水天宮参詣の記事がしばしば見られ、特に天保二年には馬琴の妻お百と息子宗伯は体調の悪化や急用がない限り、水天宮へ月参りを行っている<sup>①</sup>。宗伯は病弱であり、お百もまた持病を抱えていた。この参詣は、二人の健康祈願と考えてよい。実際、水天宮の守札は滝沢家では常備薬的に使用されており、その使用例は次のようなものであった。

一・天保二年五月廿日<sup>②</sup>、馬琴自身が腹痛に苦しみ、黒丸子や奇応丸といった家伝薬を呑んだが効なく、水天宮守札を呑んだ。この後痛みは退き、安眠を得ることが出来た。この経験を馬琴は「彼守札の靈応かくのごとし」と記している。

二・同年十二月三日<sup>③</sup>、孫のおつぎがやかんの煮え湯をかぶり、足に火傷を負った。この時は、傷へへちま水をかけ、水天宮御札を貼るという治療を行った。

三・天保六年五月五日<sup>④</sup>、宗伯の容体が悪化し、熊胆汁を飲ませるなど介抱したがもはや薬も通らぬという事態に陥った。馬琴は水天宮の守札で宗伯の胸をなで、苦痛退散を祈り、その後守札を屏風へ貼っておいた。この後まもなく、宗伯は臨終を迎えた。

四・嘉永元年(一八四八)十月二十九日<sup>⑤</sup>夕方、馬琴は胸痛に苦しみ、熊胆貳包・奇応丸貳包・煎薬等の薬を服用したが効果なく、水で水天宮の守札を呑んだ。

薬の製造販売も業とし、息子宗伯は医者である馬琴でさえ、守札を

薬と同列に使用している。庶民にとって、信心もまた医療行為であった。

「薬同様」と馬琴が信じた守札だが、その力の源を馬琴はどこに求めたのだろうか。書簡の中で、馬琴は守札の文字は「内侍所」<sup>⑥</sup>神鏡の背文字だと書いている。守札を飲むとは、鏡のパワーを体内に取り込む行為であろう。神鏡の病氣治療については、平安時代にも記録がある。天徳四年(九六〇)、内裏火災の折焰の中から自ら飛び出した神鏡を袖に迎え入れた藤原実頼がその袖を病氣の弟九条師輔の枕元に置くと、たちまちに病が癒えたというのだ<sup>⑦</sup>。馬琴によれば、この鏡はいったん海に沈み再び世に戻ったものである。平家物語には鏡の入った唐櫃をあげようとした武士が「忽ちに目くれ鼻血たる」という場面もあり、鏡の不思議な力は広く知られていたと考えられる。尼御前社が本来持っていた水難よけの神徳と、海から再び世に出た鏡の力から、水中への落し物の発見(『宝暦現来集』)や「ものゝつかへて出かぬる杯、或は咽にとげなどの立たる」(『江戸拾葉』)という、人の手の及ばぬところから取り出す不思議な力が信じられるようになったのではないか。「産にむかひて守を頂けば、直さま安産也」(『宝暦現来集』)という記述も、このイメージからの連想であろう。守札の効果として『久留米小史』<sup>⑧</sup>も、水難除けや溺れた人を探すとき守札を川へ投げれば死屍のある所で止まるといった利益とともに、「日々定薬ニコレヲ吞ミ或ハ腹痛咽喉諸病等ニモ是レヲ服用スル奇効アリト云」と伝えている。守札の薬効は、明治に至るまで長く信じられたのである。



## 第二節 松浦静山と水天宮

平戸藩主松浦静山も水天宮に関心をよせた一人である。『甲子夜話』<sup>(50)</sup>三篇卷七十四によれば、ある時、有馬家上屋敷の火の見櫓下から失火したが、邸は類焼せず、「彼邸中なる水天宮と云へる祠の在れば、是等の靈助か」といわれた。また、卷五十八には天保十年（一八三九）正月十九日、久留米藩の有職家、松岡清左衛門との問答がある。

松岡清左衛門棧舗へ来りたれば、予云ふ。近来其藩東都の第中に、「すみてんぐ」と称する神祠、殊更に発光なるが、これは何をや祭れると問へば、答に、天御中主を祭ると。予又云。平氏二位尼と世上云ふ、何ん。答。これは安德帝と尼と今は附祭せしが、正殿には非ず。予又問ふ。世水天宮と謂ふ、然るか。答。然り。是れ何の意か。答ふ。未だ審にせず。又問。今又世人水天狗と云は何か。答ふ。宮を狗と呼は、全く俗称なり逆て笑へり。（後略）

ここで注目されるのは、天御中主（以下アメノミナカヌシ）の登場である。これはなぜなのか。水天宮の江戸勧請にあつたのは水天宮神官真木左門で前述のとおり真木家は京都吉田社に属した。吉田社の祭神は国常立尊、別名アメノミナカヌシである。この神は、水徳の神であり、宇宙の始原神ともいわれ、生み出す力を秘めている<sup>(52)</sup>。水天宮におけるこの神の存在は江戸時代は庶民には知られていなかったようだが、鏡の「吐き出す力」と共に「生み出す力」として出産の守護神となつていったと考えられる。

また、「水天宮」という呼称について、久留米藩邸に祀られていた水天との習合説がある。しかし、これまで見てきたように、水天宮の利益の中心は久留米、江戸双方において水難除けであり雨乞いではない。藩邸に水天が祀られていたというのも両天宮からの推定である。「水天宮」とは水天との習合ではなく、尼御前社の水の利益を表すものとして呼びならわされたのではないだろうか。

水天宮は江戸の町人から大名まで広く崇敬され、安政三年から同五年までの間で毎年一五〇〇両余の賽銭を集めた<sup>(54)</sup>。この金額をみれば、水天宮の公開は、財政再建のための賽銭稼ぎ説<sup>(55)</sup>に傾きたくなる。しかしながら、公開された大名家の邸内社のうち、長期にわたって賑わった邸内社はごく少数であり、高額の賽銭収入を長期間得ていた社は水天宮と丸亀藩の金毘羅社だけであつた<sup>(56)</sup>。従つて、三田村説のように、藩側の神仏公開の論理をすべて「賽銭稼ぎ」に収斂することはできない<sup>(57)</sup>。水天宮の公開は有馬家主導というよりも、馬琴書簡にあるように品川の船人の信仰が江戸町人に広まり、その要請に有馬家が応えたものと考えられる。水天宮信仰がただの流行神に止まらず、広く浸透した所以であろう。

## 第三章 安産と水天宮信仰

### 第一節 龍神と水天宮

時代が江戸から明治へと変わると、明治四年（一八七二）有馬家屋敷は赤坂へ、さらに明治五年現在地の日本橋蛸殻町へと移る。斉藤月岑は『武江年表』<sup>(58)</sup>明治四年の条に「赤羽有馬侯藩邸水天宮赤坂の邸へ

移されたれど、七、八月、九月も開門なし」と書いているが、世相が落ち着きを取り戻すとともに水天宮も新社殿が整い、参詣人も増えていったようだ。表1は水天宮に関する出版物をまとめたものである。これらの出版物から、庶民が水天宮に託した願いを探ってみよう。

	書名	著者	発行年
a	『寄笑新聞』第六号	橋爪錦造（梅亭金鷲）	明治8年
b	『すいてんぐさまのごでんき 水天廻宮御由来』	甘利貞助	明治14年1月
c	『水天宮御靈驗記』	村井静馬	明治14年7月
d	『水天宮碇絵馬筆』（『新編都草紙』掲載）	孤蝶園若菜	明治16年
e	『水天宮利生深川』 めぐみのふかがわ	河竹黙阿弥	明治18年2月
f	『水天宮御利生記』（上）	石井富太郎	明治19年4月
g	『糸桜待夜の辻占』	大河内雪貢	明治19年9月
h	『高櫓力士旧 猫伝』 きゅうげよう	尾形月耕 竹葉舎晋升	明治19年10月
i	『滑稽道中 都の穴』	小池淡	明治22年4月
j	『実録有馬猫騒動記』	日吉堂	明治22年12月
k	『水天宮利生記 関東小六靈驗復讐』	吉田欽一	明治30年6月
l	『水天宮神徳記』	久留米水天宮社務所	明治30年8月
m	『東京水天宮神徳記』	東京水天宮社務所	昭和6年
n	『東京水天宮神徳記』	東京水天宮社務所	昭和13年

表1 水天宮に関する出版物

a 本『寄笑新聞』は明治七年の台湾出兵に取材した滑稽話で、水難除けの神徳が強調される。

b 本『すいてんぐさまのごでんき 水天廻宮御由来』では安徳天皇を「すいてんぐさま」と読ませ、由緒について安徳天皇が壇ノ浦で剣を帯びて入水するまでを平家物語にそって述べる。その後、久留米の海で宝剣を帯びた遺体が発見された。この遺体が誰とは知らぬまま小宮をたてたが、天皇が村の老人の夢枕で「朕水に死す。諸人水にて難儀する者ハ是を救わん」と告げ、殿様も同じ夢を見たところから、社を新築し「海中の祭神」として祭った。その後、「其濱多漁打続き、且村中の人海上にて難風に合とも不思議に其難をたすかる事度々なり」という状態で、守札の文字は宝剣のものであるという。ここで初めて、二位尼にかわり安徳天皇が水天宮の主祭神となる。

b 本と同年七月発行のc 本『水天宮御靈驗記』でも筋書きはb 本同様で、水天宮とは安徳天皇としている。ところが、その誕生には次のようなエピソードがあった。

此君（建礼門院徳子）常に神仏を希依なし玉ふ事他に越、治永二年の春、龍神を御夢に御覧じて、其月より有身とならせ玉ひ、同年十一月五日、御産の紐を解玉ひ御誕生あらせたる。是則、安徳帝王ニて渡らせ玉ふ

安徳天皇は母徳子が龍神の夢を見て懐妊した龍神の申し子、あるいは龍神の生まれ変わりであったのだ。この後、安徳天皇は三種の神器

を携えた二位尼に抱かれて壇ノ浦で入水と話は進むが、次のような後日譚がある。

安德帝西海入水のことハ御取持まします皇国の神宝十束の御剣を龍神のおし玉玉ひ、よりて一旦水中に入りしと云々。去バ寿永二年<sup>(60)</sup>、筑後のくに久留米の浦びと海上なぎよけれども此程うち続きて更に漁獵なく沖のかたをながむるに月日にゑいじてひかるものあり。漁夫怪しみて網をうち入引揚見るに、恐れ多くも宝剣を帶したる安德帝の御尊骸を引あげたり。

天皇家に伝わる三種の神器の一つ、十束の剣は龍神が欲したため安德天皇と共に海に沈んだものの、久留米沖合で安德天皇の遺体とともに引き上げられた。天皇は村長の夢に現れ、今後水難にあう者すべてを救うと告げる。これが水天宮である、というのだ。

安德天皇と龍神との関係は、鎌倉時代に成立した『平家物語』<sup>(61)</sup>「剣」の段で早くも語られている。安德天皇は実はスサノオに切り殺され、その尾に秘めていた草薙の剣を奪われたヤマタノオロチの化身で、剣を奪い返すために八十代を過ぎた天皇家に生まれ変わり、八歳で剣と共に竜宮城へ還つたのだという。安德天皇＝龍神＝オロチ説は源平争乱の時代を生きた慈円の『愚管抄』にも記されている。『愚管抄』によれば、安德天皇は平清盛の祈願に応えた厳島明神、すなわち竜王の娘の化身で海へ帰つたのだという。この説は、『源平盛衰記』や『太平記』に受け継がれ、広く庶民へ流布したものらしい。『水天宮御霊

験記』の安德天皇龍神説もこの流れに沿ったものであろう。龍神の化身であり、人間の身を水によって失ったのであれば、水難除けの神としてはふさわしい。明治十四年の時点では水天宮とは龍神の化身たる安德天皇で、その神徳は水難除けであり、それが拡大して大漁といった水に関する利益全般に広がっていったものであろう。

## 第二節 守護神としての水天宮信仰

水天宮が登場する芝居や小説は『水天宮碇絵馬筆』<sup>(62)</sup>(d)、『水天宮利生深川』<sup>(63)</sup>(e)、『糸桜待夜の辻占』<sup>(64)</sup>(g)、『高樺力士旧猫伝』<sup>(65)</sup>(以後『旧猫伝』)(h)、『滑稽道中 都の穴』<sup>(66)</sup>(以後『都の穴』)(i)、『実録有馬猫騷動記』<sup>(67)</sup>(以後『有馬猫騷動記』)(j)、『水天宮利生記 関東小六靈験復讐』<sup>(68)</sup>(以後『水天宮利生記』)(k)の七点があげられる。

d本『水天宮碇絵馬筆』は『新編都草紙』二十四編から二十七編に四回にわたって連載されているが、内容からみてさらに話はずづいたと思われる。物語は序文に『平家物語』を引用し、水天宮の助けで大団円という筋書きであろう。e本『水天宮利生深川』では招福が、g本『糸桜待夜の辻占』では仇討ち・家名再興が語られる。i本『都の穴』は東京見物の滑稽譚で、水天宮は庶民があらゆる願いを掛ける神であり、h本『旧猫伝』とj本『有馬猫騷動記』は久留米藩お抱え力士小野川の化け猫退治譚で、小野川は水天宮の霊夢によって無事妖怪を討ち果たす。k本『水天宮利生記』でも、汚名返上・敵討ち・家名再興などが語られる。

以上、七点の作品から、明治時代に芝居や小説などで一般に広まっ

た水天宮は信仰するものを強力に守る守護神といえる。江戸時代から庶民の間では水天宮は福神としての信仰の流れがあり、このような作品の中で個人の守護神として描かれたものであろう。

では、縁起ではどう語られているだろうか。『水天宮御利生記』

（f）は上巻だけしか発見できなかった。しかし、由緒や紹介される利益から『水天宮神徳記』（1）とほとんど同じ内容と考えられ、下巻には1本に紹介される利益が記載されていたと考えられる。この本では水天宮の始まりは安徳天皇の遺体が上がった事ではなく按察使局伊勢が瀬下に天皇と平家一門を祭った事にあるとする。

このほかに、f本・1本では水天宮が持つ強力な神徳が二点ある。その一つは、水難除けであり、もう一つが、産婦の守護であった。f本によれば、安徳天皇は、壇ノ浦で入水するまで母の建礼門院とともに一つ船で親しく過ごされた。従って、八歳での死別は大変悲しく、「母子の情愛ハ深く御身に染ミ込ませ玉へば、今日に至るまで御靈験の分けて産婦の守りに著きハ其の謂はれあることゝ覚え侍りぬ」と、産婦の守護神となることが初めて明記される。人が神となる場合、水に死んだ者が水難の守護神となるように、産婦の守護神であれば産で命を落とした者がその守護神となるケースが通常と考えられる。しかしながら、ここでは母子の絆を強調することで、産婦の守護神となっている。なぜ、安徳天皇は産婦の守護神となったのか。それを考える前に、f本・1本発行後の水天宮の利益について見ておきたい。

### 第三節 明治から大正時代にかけての水天宮信仰

明治二十五年（一八九二）六月六日付の読売新聞には、「水天宮・お岩稲荷などで売れる」という見出しで、絵馬が近頃は季節外れにもかなり需要がある事、特に府下では毎月五日の水天宮で売れる絵馬だけでも平均およそ三百枚であると伝えている。また、明治四十三年（一九一〇）十一月六日の東京日日新聞は「水天宮縁日で大混乱、重傷者九名」と前日五日が三十一年に一度来るという戌年戌月戌日であった縁日の混雑ぶりを伝えている。この日は重傷者九名と無数の軽傷者を出したというが、「昨年戌の年戌の月日と、三拍子揃った当時、逸早く御符を頂戴うと、水天宮の門前に、人波打って、御守符の奪合ひに、人死に迄もあった」（『東京印象記』明治四十四年）、「最近に大戌に当たったのは昨四十三年の十月の五日で、大混雑の果は二、三名の死人をさえ出してしまった」（『東京年中行事』）、「祭りの時など、雑沓の極は死人さへ出す位の繁昌の水天宮」（『江戸史蹟』）という記述を見れば、あながち誇張とも言えまい。この明治四十三年の東京日日新聞の記事には注目すべき点がある。水天宮混雑の理由に「戌年戌月戌日」をあげているのだ。水天宮の安産信仰の説明として、「戌のように安産できれば」というものがあるが、江戸時代以来の水天宮の神徳は水難よけであり個人の守護神であって、安産に特化したものではない。しかし、この記事からは水天宮が安産の神として広く信仰されていることがわかる。さらに大正になると、水天宮と安産、戌の日の信仰は、医療機関も注目するほどになっていく。

大正十一年（一九二二）五月、日本赤十字社本部産院が開院した。



日赤本部産院は、もともと「生計不如意の妊産婦・乳幼児を保護診察し……強健なる第二国民育成の基礎を築こうとする」という目的で始まった。翌年九月一日の関東大震災では、産婆看護婦（旧称）たちは入院者を裏庭の林に避難させて、無事に二人の赤ちゃんをとりあげた。この時、彼女たちが冷静沈着な行動で全員の無事を確保した話が広まり、日赤産院の名を高めることになったという<sup>(73)</sup>。それまでは入院者集めに苦心し、日赤では宣伝のため「大正十一年七月五日は戌年戌月戌日の故を以て当日水天宮の祭日は安産の守り札を受けん為参詣する男女数十万人と号す。仍て同日未明より事務員を派し同社務所及警察吏の了解を得て産院案内印刷物を配布せり」という努力もしたほどであった。これらの記録からは、明治末から大正十一年までの十数年の間に水天宮が安産の神として信仰を集めた事が伺えるのである。

#### 第四節 産科医療と水天宮

出産が、女性にとって命がけである事は言うまでもない。出産が長引けば、母子ともに死の危険が高くなる。胎児を母親の身体から分離させることは、母親の生命を守るためには必要な処置であった<sup>(74)</sup>。このため、近世においては、「安産」とは「産が早い」事であり、安産でも子どもは死亡という事もあったのである。近世の出産で重視されたのは、胎児の生命よりも母体の安全であった。このような中で、明和二年（一七六五）に『産論』を出版した京都の医師賀川玄悦は「回生術」という方法を編み出した。回生術には、死胎児の頭蓋骨に孔をあけ頭を小さくして娩出させる穿顱術と胎児の体を産婦の体内で切断し、

バラバラにして体外に取り出す截体術がある。回生術は特にすぐれた弟子にしか許されなかったが、『水天宮神徳記』（1）には回生術を施そうとする場面があり、この書が刊行された明治三十年頃には地方でも回生術が行われていた事がわかる。1本では、水天宮の守札のおかげで回生術を行う事なく出産が進み、母子ともに生き延びる。『東京水天宮神徳記』（m）、『東京水天宮神徳記』（n）ともに、利益を得た人々の手紙を掲載、安産の記録はいずれも「安産の上母子ともに健康」というものである。水天宮の安産の利益は江戸時代からの「吐き出す力」への信仰から続いていると考えられるが、リスクの高い医療を超える母子の守護神へと変化していったのである。

しかし、f本『水天宮御利生記』が説く安徳天皇が産婦の守護神となった理由は、安産ではない。「母子の情愛ハ深く御身に染ミ込ませ玉へば」という理由からである。これは、単に安産守護というよりも、母子の守護というべきであろう。では、この頃、母と子を取りまく社会情勢はどのようなものだったのだろうか。

近世末から近代にかけて、変化したものの一つに「健康観」がある。鹿野政直によれば、「健康」という語を用いてそれを定義したのは、緒方洪庵編述『病学通論』（嘉永二年（一八四九））だという<sup>(75)</sup>。近世で日常的に使用されていた「健康」に類する言葉は「養生」で、文明開化期を通過するなかで「健康」が常用化されていく。明治八年（一八七五）、啓蒙思想家西周は『明六雑誌』に寄稿した「人世三宝説」で新しい健康観を世に問う<sup>(76)</sup>。鹿野によれば、この頃孝養を尽すための徳目の一つであった「養生」から、積極的に獲得していく目標としての

健康観が成立した。また、「健康」は、欧米人と接していくために日本人の体格向上をめざすためにも必要であった。「健康」獲得のために必要とされたのが「衛生」である。

明治十二年(一八七九)、地方衛生行政として公選の衛生委員制度が設けられた。東京市の区部の場合、各区にほぼ一組合があり、会報を発行して住民へ衛生知識を与え、啓蒙に勤めた。この衛生を保つ役割を担ったのが女性、特に母親である。京橋衛生会が発行した『衛生月報』には「育児上の注意」「小学校及家庭と結核予防」「蠅と伝染病との関係」などが掲載され、母親に期待された役割を知ることができ、家族、特に子どもの健康や衛生に気を配る慈愛に満ちた母親像は、母と子の絆の象徴であった。水天宮の由来において、建礼門院が安徳天皇に慕われる母として登場するのも、このような社会を反映しているのではないだろうか。

近世から近代へ、医学の発展は目覚ましいものがある。江戸時代はむなしく死んでいたものの救命率も格段に向上した。近世に比べて命の危険性が低下したこともまた事実である。それ故に、助からない命、助けられたかもしれない命に対する哀惜の情は深い。同時に、さまざまに手をつくしての高度の医療行為の中でのリスクも否定できない。皮肉なことに、生命を救うための医師が先鋭化すればするほど、新たなリスクが立ち現われてくるのである。このような、不安に揺れ動く心を支えるものとして医療の神が望まれるのではないだろうか。

## おわりに

現在でも水天宮は安産の神として篤い信仰を集めている。平成十八年(二〇〇六)、東京水天宮では助産師の育成を支援するため「東京水天宮助産師育成支援制度」を設けた。少子化、助産師不足が社会問題化している中、安産の神としてできる事を、と考えられたものである<sup>⑧</sup>。

平成二十二年(二〇一〇)十一月、久留米水天宮では新しい利益が誕生する。久留米市内の和菓子店七店が提携し、紅白の饅頭「水天宮恋ものがたり」を共同開発したのである。安徳帝の恋物語にちなみ、饅頭には水天宮のお祓いを受けた御守がそえられている。長引く不況の影響もあり経済的理由から結婚が厳しいとも言われる現代にあつて望まれるのは「恋」であり、その先にある「結婚」なのであろう。人々は安産に到る前の「恋」の段階からの利益を水天宮に託しているのである。

水天宮とは、本来筑後川畔に祭られた川の女神であった。「水天」の名から「水天供」を連想させ、雨の神との指摘もあるが、水神としての性格は洪水を引き起こす荒ぶる川の神である。久留米城下町瀬下の守護神となると、水上交通の神として船霊信仰の様相を帯びてくる。江戸へ勧請公開されたのは文政元年だが、公開以前から品川の船人の間で信仰され、このルートでも江戸町人の間へ広まったと考えられる。水天宮の守札は、水難除けのほか医薬としても用いられた。これは、水天宮に習合する平家伝説に由来する。海に沈んだ鏡あるいは剣が再

び浮かびあがったところから、水中の鉄物の搜索、さらに人の手の及ばぬつかえたものを取り出すという利益へ、ここからの連想で安産信仰へと広がったものであろう。この頃は安産を含む除災招福の神であった。祭神の中心は二位尼に擬されたが、ともに祭られるアメノミナカヌシは「生む力」を持つ神でもあった。

明治になり、水天宮は現在地の蠣殻町へ移転する。しかし、江戸時代からの信仰は変わらず、水難除けを利益の中心とし、個人の守護神としても信仰された。この頃から祭神が二位尼から安徳天皇へと変化する。さらに、明治十九年には建礼門院が登場し、母と子の絆が強調される。これは、幕末から明治にかけての健康観の変化が影響しているのではないだろうか。この頃に、江戸以来の孝養のための手段としての「養生」から、積極的に獲得していく個人の目標としての健康観が登場してくる。また、この新しい健康を獲得し、守るための「衛生」は母親の役割であった。子どものために目を配り、手をかける慈愛の母と子の絆が理想とされたのである。水天宮信仰の、子育て・安産の利益はこのような社会風潮を反映しているものであろう。

#### 〔注〕

- (1) 文政四年（一八二二）～明治二十八年（一八九五）。国文学者、日本史学者。号陽春廬。明治十二年（一八七九）『古事類苑』編纂に従事、明治十九年より『古事類苑』編纂委員長。
- (2) 「水天宮考 十一年十一月稿」（明治二十六年一月起筆）『陽春廬雜考』（吉川半七、明治三十八年）
- (3) 明治三年～昭和二十七年。
- (4) 樋口勇夫。慶応元年（一八六五）～昭和七年（一九三二）。御原郡井

上村出生。関学研究の大家で、早稲田大学、法政大学、東方文化学院、国学院大学などの漢文講座を担当。大正元年、旧藩主有馬伯爵家に「伯爵有馬家修史所」（後、伯爵有馬家々史編纂部）で編纂主任を務めた。（『久留米人物誌』）

- (5) 「今井自記」という書に「元禄七、二月八日御類焼（芝三田本邸なり）但四つ谷より出火三田金杉迄焼。其後目黒十二天之内火風神御勸請有之、是を両天宮と云」とあるという。（銅牛「両天宮と水天宮（鷺魚主人に質す）」『日本及日本人』六五一号、一九一五年三月）

- (6) 明治二十五年（一八九二）～昭和四十九年（一九七四）。岩手県江刺市藤田後田に出生。大正九年三月、広島高等師範学校卒業後、福岡県立中学明善校教諭。大正十年、南国の旅の帰途、柳田国男が旧知の明善校校長川口孫治郎を訪ね、座談に同席した及川は柳田に刺激され民俗研究の道に入った。（『久留米人物誌』）

- (7) 『歴史と地理』第十二巻第三号第五号（一九三三年九月～十二月）に発表された。

- (8) 宮田登『近世の流行神』評論社、一九七五年。

- (9) 宮田登『宮田登 日本を語る 4 俗信の世界』吉川弘文館、二〇〇六年。

- (10) 「久留米市史」第二巻、久留米市史編さん委員会、一九八二年。

- (11) 「水天宮の研究（四）」『歴史と地理』第十二巻第六号、史学地理学同致会、一九三三年

- (12) 原書名は「社方開基」（篠山神社文庫蔵）。元は全八冊であったが、現在では六冊が残る。各郡・大庄屋組ごとにまとめられ、受持社人の書き上げ形式で、松崎支藩分は除かれている。昭和五十六年、『寛文十年久留米藩社方開基』の名で久留米郷土研究会から刊行された。水天宮は、社伝によれば初め筑後川岸の鷺野原に祭られたといわれ、近くの下野、小森野、江南山（梅林寺山）、光勝寺などを転々とし、瀬下に社地を拝領する前は新町一丁目にあった（古賀幸雄『宗教文化誌「蓮の実」掲載 郷土を語る』久留米郷土研究会、二〇〇二年）。

- (14) 名は重臣。水天宮創始者である按察使局の養子平右忠より一六代目の水天宮神官。肥後国真木村出身で、平掃部介(龍臣)の養子となり、真木忠左衛門と称した。真木姓はこれより始まる。(『久留米人物誌』)
- (15) 久留米藩有馬家二代藩主忠頼。〈明暦元年(一六五五)『社方開基』に「筑後国山本郡蟬川村荒五郎大明神、牛馬守護神、禰宜号酒見次太夫と、龍宮神智僧二年十一月廿三日ニ此界ニ上給候。荒五郎大明神を祝初候。其時酒見大学と申者禰宜仕、十一月廿三日ヲ祭礼日ニ定、祭礼仕初候。以来千百余、代々之禰宜私迄退転不仕、祭礼仕、牛馬安穩と令祈修候」とあり、荒五郎とは水神であり牛馬守護神であると指摘されている(『久留米市史』第五卷、久留米市史編さん委員会、一九八六年、三九九頁)。また、安坊も水神であり、両神とも河童の姿ともいわれる(同前書)。
- (17) 牛馬守護の水神祭「ダブリユウ(駄風流)」である。旧十一月(霜月)十四、十五日に実施される。祭りは、七つの地区を一年に一度当番地区としてめぐり、当番地区の三歳から小学校六年までの子ども三人が参加する。八丁島の外れの堀には大蛇が住んでいたと言われ、この堀を川舟に乗った神職と子どもたちが三回めぐり、玄米三升三合の御供を沈め、対岸の人が堀中の島の楠めがけて二本の矢を放つ(『久留米市史』第五卷)。昭和六〇年六月二十六日市指定無形民俗文化財。
- (19) 前掲注(16)『久留米市史』第五卷、六一〇頁。
- (20) 同右、六一五頁。
- (21) 『久留米市史』第二卷、久留米市史編さん委員会、一九八二年、九五二頁。
- (22) 六車由美『神、人を喰う』新曜社、二〇〇三年。
- (23) 山中耕作「筑後路の平家物語」(『筑後地区郷土研究』一号、筑後地区郷土研究会、一九六八年)、『久留米市史』第五卷。
- (24) 井上智勝「近世神社通史稿」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一四八集、二〇〇八年。
- (25) 藩政期の筑後地方研究に不可欠の文書として定評がある。瀬下町豪商の石原為平(天明八年(一七八八)没)が、有馬入国以後安永二年(一七七三)までの一五〇年間、年次を追って内外の見聞・逸事・社寺縁起・天災地変その他を記述したもの。元来二〇巻。若干散逸し、昭和十九年、筑後史談会が宝暦十三年(一七六三)までの完本分と明和・安永期の数年分を上・下二冊に分けて刊行。一九七三年、名著出版会が復刻版出版。
- (26) 元和四年(一六一八)〜宝永二年(一七〇五)。後に藤井懶斎と称す。京都で医師・儒者として名高く、二十五歳の時、久留米藩有馬家三代藩主頼利は禄三百石で久留米に聘して藩医とし、藩士に儒学を教授させた。延宝二年七月、誤診で患者を死亡させ、職を辞して帰京。『北筑雑藁』は帰京に当って著したものである。
- (27) 校訂者武藤直治、大庭陸太『校訂筑後地誌叢書』株式会社歴史図書社、一九七七年。
- (28) 享保十年(一七二五)〜寛政五年(一七九三)。久留米城下町京限の洗切に出生。清兵衛と称し、号は観斎。正仲は博学で、五十余种の著書がある。(『久留米人物誌』)
- (29) 本来、尼御前社の祭日は四月一日であったが、元文三年(一七三八)、六代藩主則維(梅厳院)の忌日と重なったため四月五日に改められた。
- (30) 筑後川農業水利誌編纂委員会『筑後川農業水利誌』、『久留米市史』第五卷。
- (31) 戸田熊次郎(信一、中小姓から奥祐筆に進み、晩年公事方調役。文化二年(一八〇五)明治十五年)の著述。有馬家初代豊氏から十代頼永時代までの藩主事歴や領内の動向・事情を藩主ごとに記し、原書は全四巻構成。昭和七年刊行の『久留米市誌』(下)付録に全文収録。
- (32) 「御勤向記録」(久留米市民図書館蔵新有馬文庫)に写しがある。天保二年(一八三一)山田桂翁著。桂翁は宝暦十年(一七六〇)生まれで、『宝暦現来集』は見聞を集めたもの。『続日本随筆大成別巻
- (33)



- 近世風俗見聞集』6（吉川弘文館、一九八二年）による。
- (34) 『未刊隨筆百種』第一巻、日本中央公論社、一九七六年。原本は著者不明、小宮山南梁旧蔵。
- (35) 『遊歴雜記』『江戸双書』巻之6、江戸双書刊行会、一九六四年
- (36) 水天宮の守札は現在も当時と同様の形式で、木版で五つの文字があるところから「いつもじ（五つ文字）」とも呼ばれている。
- (37) 齊藤月岑著、朝倉治彦校注『東都歳時記』1、平凡社、一九七〇年。
- (38) 柴田光彦新訂増補『曲亭馬琴日記』（中央公論社、二〇〇九年）を参照とした。
- (39) 柴田光彦、神田正行編『馬琴書翰集成』第二巻、八木書店、二〇〇二年。
- (40) 『玉葉』によれば、海に沈んだのは劍のみで、玉璽と鏡は都に帰っている。このことは、『平家物語』他の軍記物語でも同様である。
- (41) 前掲書簡によれば、「去年より月詣」とある。とすれば、日記にはないが馬琴の水天宮参詣は天保元年から始まったものであろう。
- (42) 『曲亭馬琴日記』二巻、三七六頁。
- (43) 同右、五一七頁。
- (44) 宗伯長女、馬琴の孫。文政十三年閏三月十三日生。
- (45) 『曲亭馬琴日記』四巻、三二五頁。
- (46) 同右、四九〇頁。
- (47) 斎藤英喜『アマテラス』株式会社学研マーケティング、二〇一一年。もちろん、馬琴も『平家物語』を読んでいる。馬琴の作品『俊寛僧都嶋物語』には引用書として長門本平家物語・源平盛衰記・東鑑・玉海・千載集・宝物集・保暦間記・義経記など十五部があげられている。また、播本眞一氏によれば、馬琴の拔書『故事部類抄』には「日本紀」三百項目、「東鑑」百六十項目について「平家物語」八十一項目の拔書があるという。（大高洋司「曲亭馬琴と平家物語―長門本享受への一視覚―」、『海王宮―壇之浦と平家物語』三弥井書店、二〇〇五年）
- (49) 戸田乾吉『久留米小史』一八九四年。

- (50) 松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂『甲子夜話』三編5、平凡社、一九八三年。
- (51) 松岡辰方、明和元年（一七六四）〜天保十四年（一八四三）。父は長州藩士酒井黙示。早くより塙保己一の和学講談所に入り、その著述事業を助けた。有職故実家として久留米藩に仕え、幕府にも召された。（『久留米人物誌』）
- (52) 山本ひろ子『中世神話』岩波新書、一九九八年。
- (53) 白杵藩稻葉家十一代藩主雍通は文政三年四十四歳で隠居後毎月水天宮へ参詣している。（江後迪子『隠居大名の江戸暮らし 年中行事と食生活』吉川弘文館、一九九九年）
- (54) 「江邸勝手方記録」（久留米市民図書館新有馬文庫）
- (55) 三田村鳶魚「水天宮及び久留米侯頼徳」、『三田村鳶魚全集』第一巻、中央公論社、一九七六年。
- (56) 岩淵令治「武家屋敷の神仏公開と都市社会」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集、二〇〇三年。
- (57) 同右。
- (58) 『増訂武江年表』2、平凡社、一九七三年。
- (59) 「治永」という年号はなく、治承二年（一一七八）の誤りであろう。
- (60) 安徳帝の入水は、史実では寿永四年（一一八五）である。
- (61) 安徳帝と龍神については以下の書に詳しい。山本ひろ子『変成譜』春秋社、一九九三、「神話と歴史の間で」（上村忠男ほか編『歴史を問う1 神話と歴史の間で』岩波書店、二〇〇二年）。
- (62) 著者孤蝶園若菜（安政元年・一八五三〜大正七年・一九一八）。本名若菜貞爾、（『日本近代文学大事典』講談社、一九七七年。国立国会図書館蔵。
- (63) 国立国会図書館蔵。
- (64) 同右。
- (65) 同右。
- (66) 同右。
- (67) 『明治ニュース事典』第四巻。

- (68) 『明治ニュース事典』第八巻。  
(69) 若月紫蘭著、朝倉治彦校注『東京年中行事』Ⅰ、平凡社、一九七七年。  
(70) 『近代日本地誌叢書 東京編⑧』(戸川残花口述『江戸史蹟』内外出版協、明治四十五年)一九九二年、龍溪書舎。  
(71) 『江戸東京はやり信仰事典』北辰堂、一九九八年。  
(72) 日本赤十字本部産院『日本赤十字社本部産院史 創立第十周年記念誌』一九三二年、四頁。  
(73) 藤田真一『お産革命』朝日新聞社、一九七九年、一九〇頁。  
(74) 前掲注(72)、九頁、十頁。  
(75) 沢山美果子『出産と身体の近代』勁草書房、一九九八年。  
(76) 同右。  
(77) 鹿野政直『桃太郎さがしー健康観の近代』朝日新聞社、一九九五年。  
(78) 同右。  
(79) 同右。  
(80) 成田龍一「衛生環境のなかの女性と女性観」『日本女性生活史 近代』女性史総合研究会、一九九〇年。4  
(81) 吉岡利忠「時は今」助産師支援事業『助産師教育』No.五九、全国助産師教育協議会、二〇〇八年。  
(82) 久留米に残る伝説によれば、安徳帝は壇ノ浦から久留米へ落ち延び、元久二年(一二〇五)に二十七歳で白口村(現久留米市荒木町白口)にて崩御された。白口に安徳姓が多いのは安徳帝に由来するという。

(こが みづえ 文学研究科仏教文化専攻修士課程修了)

(指導教員：松永 知海 教授)

二〇二二年十月一日受理